介護新聞2009年2月19日

# 花凪屋繁盛記

連載14

## 人と人とがつながって

NPO法人在宅生活支援
サービスホーム花凪
木村美和子理事長

### おめかしして、出かけよう

二〇〇五年の八月下旬でした。「忙中閑あり」の、ぽかっと空いたある日のある時間のお気楽夫婦の会話です。

「下宿のみなさん、定期的にデイに通うようになってからますます元気になったね」

「そうだね」

「私いま、考えたんだけど、『花凪家族』は外出や旅行の経験はあっても、ホテルでのパーティー経験ってないよね」

「そうだね。元気な時にはあっただろうけどね」

「どこかのホテルでパーティーをしようか？　う～んとおしゃれして参加してもらおう！」

「何のパーティーにするの？」

普通は、「原因があって結果となる」なのですが、みなさんにホテルでのパーティー経験をしていただきたいがために、何かのお祝いを作り上げようとする二人。

「そう言えば、『花凪』ができてから五年だね」

指を折って数える夫。

「そうかぁ。会いたいと思いながら会えないが、いつも懐かしい人もいるし、あれやこれやを含めて、五周年パーティーっていうのが良いね」

「いいね。いいね」

こうやって発案された「花凪誕生五周年パーティー」は、この日から一カ月ちょっと後の十月一日、とあるホテルで開催されました。

### 準備もワクワク、ウキウキ

参加者は下宿人たちとご家族、スタッフ、会員、これまで支えてくれたボランティアという本当に身内だけの八十一人。冷静に考えると、誰一人「急に言われても」などと言わずに「そうですか」と、参加してくれたのはすごいことです。

さて、宴の方はほとんどの人もと違っていたことが一つありました。

それは「目一杯おしゃれをしてきてください」と案内状に書いた通りに、みなさんが思いっきりおしゃれをしてきたことでした。もちろん、下宿人たちも例外でなく、バッチリお化粧しての参加です。

下宿人十一人に、パーティーの内容と、「おしゃれをすること」が参加条件であることを話したのが当日の一カ月前。それぞれの当日の衣装を準備し始めたのが一週間前。というように宣言は早くても、仕上げが慌ただしい相変わらずの『花凪』でしたが、エピソード満開の楽しい時間でもありました。

Hさんの娘さんは、先に持参したドレスが「地味なので」と、派手めの上着と装身具を再度持参。さらに「後頭部が寂しくなっているので」と、カツラまで持参されました。

Nさんの息子さんは、「父はやっぱりこれです！」と、胸を張ってスーツ一式を持参。Nさんは行きつけの理容室まで息子さんに同行してもらい、散髪もすませてきました。

お身内が遠方にいる下宿人たちは、私と女性スタッフがお手伝いして手持ちの衣類を吟味したり、新たに購入したりと、楽しみながら整えました。

パーティー前日は、スタッフが大奮闘でカラーリング。黒くなりすぎて、かえって不自然と、栗色に染め直したTさんをはじめ、そんなこんなで午後七時過ぎまでかかって準備が終了しました。後は明日の本番で下宿人たちの麗しいお姿にお目にかかるだけと、心ウキウキでした。

５周年式典に着飾って出席し、お孫さんと一緒の花凪家族。ホテルでパーティーは毎年恒例に

### さて、当日です

当日は快晴でした。会場の入り口で待つ私の前に、下宿人たちがさっそうと現れました。私は嬉しくて「オー！　オー！」と、心の中で喜びの感嘆符の連続でした。

いつもは外股で歩いているAさんが、お化粧をしてワンピースを着用したためか内股で歩いていたり、近頃は腰をかがめ伝い歩きのNさんが、息子さんに寄り添われながらも、毅(き)然として歩いていたり、などなど。誰もが「～している」という自発性に富んだ動作で、誰一人「～されている」人はいませんでした。

自分の意志で目的の場所に前進するみなさんは、一言でいうと「かっこいい」でした。この姿が見られただけでも、パーティーを企画したかいがあったと思いました。

### さて、開宴です

お互いのグラスに「あ・うん」の呼吸でビールを注ぎ合うNさん父子。Oさんのお皿にセッセと好物を取り分ける娘さん。ずれてしまうカツラをしきりに直してあげる娘さんと、意に介さず食欲旺盛なHさん。海を渡ってはせ参じた甥(おい)っ子さんと、満面の笑みで言葉を交わすTさん。そこここのテーブルで血のつながった身内の交歓光景が見られました。

それを眺めながら、人はいろんな顔を持っていて、いろんな役割を持っているのだから、それを出せる状況を常につくるべきなのだということを改めて思いました。